

「佐仁小学校の佐仁八月踊り伝承活動の取組」

1 学校名

奄美市立佐仁小学校

2 学年・人数

全児童（計11人）

3 日時・場所

(1) 練習の日時・場所

ア 練習の日時

令和2年4月～令和3年3月（朝の会）

イ 練習の場所

各教室及び体育館

(2) 発表の日時・場所

令和2年11月14日（土） 学習発表会（本校体育館）

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能、伝統的行事について

(1) 名称

佐仁八月踊り

(2) 由来

起源は不明であるが、ノロ神の祭式の踊りとして端を発したらしい。そこに村人たちも加わり旧暦8月の丙（ひのえ）を「アラセツ」、壬（みずのえ）を「シバサシ」として、家々を踊り回りながら、火災予防祈願をしたことが由来となっている。その後、五穀豊穡祈願の意味も加わり、グループ形成の踊りに形態を変えながら、現在に至っている。

(3) 構成等

「イソ(衣裳)踊り」を踊りながら最初の家に向かう。チゼンの音を聞きつけた住民が集まり、輪になってシマ唄に合わせて踊り始める。男性が打ち出す歌に女性が歌い返しながらか最初はゆっくりと踊るが、途中からチゼンの刻むリズムが速くなり、踊りも激しくなる。2曲ほど踊ると、最後は「六調踊り」で締めくくる。なお、チゼンを打つのは女性と決められているのが佐仁の特徴である。

5 保存会や地域との連携の具体

佐仁校区の八月踊りは県の無形文化財に指定されるなど、文化的価値が高い伝承文化として有名である。一方で近年は、歌いながら踊ることができる後継者の育成が校区のニーズとなっている。そのニーズに対し、本校では、月1回のシマ唄・八月踊り教室を教育課程に位置付けてきた。また、ナカドゥチェス市中学生との交流学习やふるさと体験留学生との交流、鹿児島大学の教育環境観察実習の活動に、校区の方々との合同練習

会を位置付け、本物に触れる機会としてきた。しかし、本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、講師の招聘ができなくなった。また、各種の交流学习もすべて中止となり、校区の方々の合同練習が実施できない状況となった。

そこで、本年度は、指導の方向性を「本物に触れさせる」ことから「慣れ親しませること」に転換し、日常的に八月踊りに触れることができるような取組を工夫した。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

校区のニーズに応え、後継者育成を意図した伝承活動を行うためには、まず、子供に明確な目標をもたせることが必要であると考えた。そこで、「学習発表会で子供だけの八月踊りを披露する」という目標を共有した。その際、今年度は校区の方に教わる練習会を開催することは難しいことを伝え、コロナ禍においても目標を達成するための取組について子供と話し合った。その結果、「朝の会で、CDに合わせて踊り唄の練習をすること」「週に1回、11人全員で集まって踊りの練習をすること」「掃除の時間に、八月踊りのCDを流すこと」になった。なお、各学級の朝の会における練習は、踊り唄を覚えたタイミングで、歌いながら踊らせる練習にシフトさせていった。

7 取組の様子

朝の会や掃除時間における日常的な取組によって、1学期の終わりには「イソ踊り」「ヤソレノトエトエ」「徳ぬ山岳」の踊り唄を歌えるようになった。そこで、2学期以降は、各学級の朝の会における取組を、踊り唄練習から歌いながら踊らせる練習にシフトさせていった。

日常的な取組の結果、11月の学習発表会では、子供たちだけで踊り唄を歌いながら、「イソ踊り」と「ヤソレノトエトエ」を披露することができた。



【学習発表会での披露】

8 参加児童・校区住民・教員等の感想・意見

4月は言葉が全然分からなかったけれど、毎日の練習を頑張ったら、先生やお兄さんお姉さんに「すごく上手になったね」とほめられました。今では、歌いながら踊ることができます（1年生児童）。

11人という少人数でありながら、子供たちだけで歌を歌いながら上手に踊ることができていた。新型コロナウイルス感染症の影響で、合同練習もできず、校区の八月踊りも中止になった中、大したものです（校区住民：学習発表会の感想より）。

新型コロナウイルス感染症の影響で地域の保存会の方々の御指導をいただけない中、短い時間の取組を毎日続けてきた。本物に触れることができないハンディの中でも、学習発表会での披露という目標を達成できた。コロナ禍が収束しても、日常的な取組は続けていくべきだと感じた（本校職員）。